

フットパスを活かした地域づくり活動調査

龍谷大学法学部・教授 里山学研究センター・センター長

牛尾 洋也

龍谷大学法学部・2回生、3回生

本田 大輝・山本 英樹・由良 康太・米住 京子・井上 優大・中田 景子
安田 奈於・湯川 希・斎藤菜乃子・澤村 奈叶・鈴木彩有里・中原 広貴
野間 元綺・吹野 僚平

I	はじめに	
II	フットパス総論	: 本田大輝 山本英樹 由良康太
III	東近江市	: 米住京子
IV	北海道	: 井上優大 中田景子
V	東京都町田市、山梨県甲州市	: 安田奈於 湯川 希
VI	熊本県美里町	: 斎藤菜乃子 本田大輝
VII	龍谷祭の取組について	: 澤村奈叶 鈴木彩有里
VIII	コース案の説明	: 中原広貴 野間元綺 吹野僚平
IX	総括	: 由良康太

I はじめに

牛尾洋也

里山学研究センターで取り組んでいる「琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究—Satoyamaモデルによる地域・環境政策の新展開—」というプロジェクトにおいて、「資源と産業」研究班では、地域独自の「食」の研究を行い、地域における持続可能な生産と消費の構造を追求することを目的とし、「人と暮らし」研究班では、地域の歴史的文化的資源や産業資源を活用し、地域づくりに資する新しい自然調和型社会の関係性構築に向けた研究を行うことを目的としている。

今回は、琵琶湖に接する東近江市において、フットパスのコースづくりの活動に着手しているが、その前段の調査として、後述のように、全国のフットパスの先進地域の取り組み事例を調査し、学内でアンケート調査を実施し、東近江市でいくつかのコース案を作成する準備を行った。

詳細は、共に調査に当たった後述の学生の報告に委ねるが、フットパス調査の意義について若干触れておく。

下記の記述にもあるように、パブリック・フットパス（Public Footpath）はイギリスにお

いて長い歴史のなかで育まれた公衆の歩くみちであり、今日、権利として確立したものである。すなわち、近世のいわゆる囲い込みを契機に問題化した人々の歩く権利は、様々な前史を経て、1932年の「歩く権利法（Rights of Way Act 1932）」制定に至り、さらに、2000年に、ムーアのような田舎の地域を一定の道に沿って「歩く権利」を認める、いわゆるパブリック・フットパスの権利法（the Rights of Way and Access to the Countryside Act 2000）の制定 [Ball 2006: 10] において結実した。

フットパスの権利は、他人の土地上の一定の道上で、往来し、景色を楽しみ、通行人と話し、写真を撮り、道端でピクニックをするために立ち止まるなど、通行だけでなくそれに付随する合理的な目的（purposes reasonably incidental thereto）のために他者の私的な土地を使うことができるものである。もっとも、それを超えた使用については、他人の土地にいる資格を超え侵入者となる。また、道が使われなくても権利は消滅せず、沿道の土地所有者は、土地の占有者として、例えば道の状態によって引き起こされる事故などについて、フットパスの歩行者に対する管理義務を負うことがある。フットパスの権利は、土地に関し、排他性がなく、様々な利用権と共存しうる歩行する開かれた公衆の権利である（Riddall, J. Trevelyan, J [2007] Right of Way, 4th edition, p. 11-14）。

この権利の面白さは、日本のいわゆる物権という排他的、絶対的権利の枠組みにとらわれることなく、共同で道を利用しあう調和的な権利が土地や空間上に層状的に重なって存在すること認めていることにある。すなわち、イギリスでは、フランス人権宣言第17条におけるような、封建的な財産概念から「絶対的財産概念（the concept of absolute property）」への転換がなされなかったため、不動産統一原則が欠如しており、財産は権利の束（property is a bundle of rights）などと理解され、大陸法では地役権として契約により特別に設定されなければならない通行権が、コモンロー上、所有権に付着する権利として慣習法的に認められている（Ball, J [2006] “The Boundaries of Property Rights in English Law, Report to the XVIIth” International Congress of Comparative Law, July）。

その結果、コモンランドを含め、土地の利用は層状に重なり合っているため、売買などにより土地を所有した者も、それまでの利用関係を排除できず、全く異なった土地の開発に対する歯止めとなり、自然保護や環境保護に結び付いている。

権利に関する管理や取引上の簡便性を追求する従来の日本の法的思考とは異なるが、人々の生活の多様性、生態系を含めた環境の多様性と有限性を思う場合、日本においても、新しい権利のあり方を考えるうえで有用であると思われる（詳細は、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子編著『琵琶湖水域圏の現状と可能性—里山学からの展望—』（晃洋書房 2018）を参照されたい。）

下記の報告書は、もっぱら編集側の責任において、ヒアリングの結果を編集しまとめた形式で報告を行っている。

今回のヒアリング及び現地調査、コースづくりに当たっては、東近江市をはじめ、各市町村および各種のNPO団体に多大なご尽力を賜った。関係者各位には、この場をお借りして心より感謝を申し上げたい。

Ⅱ フットパス総論

本田大輝 山本英樹 由良康太

1 フットパスとは

フットパス（footpath）とは、イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、古い街並みなど、地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径【Path】”のことであり、ひいてはこの道を歩くことの総称である。

2 イギリスにおけるフットパス

(1) 背景

イギリスにおいて土地は貴族や資産家などが大きな区画を所有する大土地所有が多く見られる。そこでは地主たちが美しい田園風景を守ることがステータスとされた。そんな中イギリスでフットパスが登場したのは産業革命の後であり、革命によってもたらされた急激な都市化によりロンドン市民は劣悪な居住環境の下での生活を余儀なくされた。

このような環境問題が深刻化するなかで、1860年代にロンドンの貧困地区で、社会改良運動として出発したのが原点であるとされている。産業革命で疲弊した労働者たちが、土地を囲い込まれてしまった国土を「せめて歩かせて欲しい」と運動を起こし、そしてその結果勝ち得たものが歩く権利なのである。この歩く権利をもとに発展したものが現在のフットパスである。

(2) 歩く権利について

イギリスのフットパスにおいて最大の特徴といえるのが「歩く権利」というものの存在である。パブリックとは公衆を意味しておりその要求と戦いがあったからこそ歩行道が確認され、判例や法律によって歩く権利が認められた。つまりフットパスとは国民に正当に認められた権利の上に成り立つ存在であるといえる。またイギリスにおいてフットパスが通っている土地の多くが私有地であるということも大きな特徴である。また、歩く権利とは歩くことのみを目的としたものではなく、「歩く権利」が実行されるフットパス（歩行道）を守ることの動機になりそのことが周囲の自然環境、景観保全につながるという実に幅が広い役割を担っている権利であるといえる。

(3) 内容

イギリスの散策の愛好家が誇りにしているパブリックフットパスとは「長距離歩行道」である。長距離歩行道には公式なものと非公式なものが存在し、公式な「ナショナルトレイル」と呼ばれる歩行道は15本、非公式な長距離歩行道は50本ほど存在する。整備された「ナショナルトレイル」は週末の2泊3日、あるいは1週間以上の散策を求めて設置された。

(4) 経済効果

ウォーキングの最大団体であるランブラーズ協会によると年間8000億円、正規雇用だけで年間24万5千人と発表されている。宿泊料として、またビールやチーズなどの特産品販売等の観光面だけでなく、農地改良や環境保全などの分野からも雇用が発生している。

3 日本におけるフットパス

最近では日本でもフットパスへの関心が高まっているが、これはイギリスのフットパスを単に模倣したものでは無い。日本では今から20年ほど前、自分の地域を歩いて新たな発見を楽しむ活動が自然発生的に日本の各地で始まった。イギリスで産業革命の後に人間性の回復を求めてフットパスが始まったように、日本でもバブル経済が崩壊した1990年代後半に始まった。ただ日本のフットパスはイギリスのような法的な権利ではない。

(1) フットパスの採用

従来観光政策の主流は、イベント開催等の観光客の集客を狙うものであった。しかし、仮に注目が集まったとしても一時的なものになりやすいという欠点があった。そこで、持続可能な滞在型観光、つまりフットパスを採用するようになったのである。

* 元来、道の機能として内在されている「景観形成機能」に着目し、景観自体を一つの文化財として認識することによって、その文化的な価値を正しく評価し、地域で守り、次世代へと継承していくものとして社会的に位置付けたのである。これによって形成されてきた文化的景観を、より積極的な意味で活用していこうという動きがあり、それがフットパスなのである。

(2) フットパスの魅力

歩くひとを楽しくさせるだけでなく、地元の人をも地域の魅力と誇りを目覚めさせ両者をまちづくりに引き込む力を持っている。フットパスを始めることにより自然とまちづくりが進み、地域住民が楽しく交流する中で素晴らしい町ができていく。また、既にまちにある資源を活用し、強化させ、長続きさせることができる。

(3) フットパスの特性

1) まちづくりに必要なほとんどの要素を含んでいる

フットパスを作る過程でまちづくりに必要な効果を楽しむことになるので、ノウハウを把握することができればフットパスを作ることで活性化につながる。

2) どんな地域でもできる

資源がなくても、資金がなくても、どんなまちでも作ることができる。このことからそのまちのオンリーワンの魅力が浮き彫りになると言える。

3) 現代の象徴である

フットパスは新たな時代の「観光」として期待されており、今後の着地型観光の王道となるべき可能性を秘めている。復興支援や東京オリンピックを見据えると、フットパスがこれからの観光の主流となっていくと考えられるだろう。

参考

- ・神谷由紀子（編著）『フットパスによるまちづくり』（2014 水曜社）

Ⅲ 東近江市

米住京子

1 概要

東近江市は、滋賀県の南東部に位置し、北は彦根市、愛荘町、多賀町、南は竜王町、日野町、甲賀市、西は近江八幡市と接しており、東は三重県との県境になっている。市の地形は東西に長く、東に鈴鹿山、西に琵琶湖があり、市の中央を愛知川が流れ、市の南西部には日野川が流れており、この両川の流域には平地や丘陵地が広がり、緑の豊かな田園地帯を形成されている。さらに、地域内には箕作山や徹山など山々が点在し、豊かな自然に恵まれている。

2 経緯

年月日	
平成17年2月11日	八日市市・永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町の5つが合併して東近江市が設置される
平成18年1月1日	5つの市町村に加えて、新たに蒲生町・能登川町が東近江市に合併した

3 東近江の各地域

(1) 五個荘地区

五個荘町は、湖東平野のほぼ中央に位置し、周囲を和田山や箕作山などに囲まれているとともに、東側には愛知川が流れており、自然の豊かな地域である。集落には町の由来となった聖徳太子によって創建されたとされる寺社が残っており、歴史の古い町であると考えられる。

そういった中で、特に特徴と考えられるのが、三方よしの精神をもって近江だけでなく、日本全国を飛び回って商いを行っていた近江商人である。五個荘の金堂地区では中江準五郎邸や外村宇兵衛邸をはじめとして今なお多くの近江商人の屋敷がきれいな状態で残っており、当時の商人の生活を感じることができる。

また、2015年（平成27年）には、滋賀県が文化庁の認定する日本遺産に「琵琶湖とその水辺景観」というテーマで選ばれたことから、水と生活のかかわりが注目されている。ここで、五個荘と水のかかわりが重要であると考えられる。五個荘の街中では、商人屋敷をはじめとして白壁や黒く焼いた舟板塀が様々な住宅で見ることができるが、この2つよりもよく見られるものが、水路である。これらの水路は、水の乏しかった五個荘の最大の難問であった火災対策のためである。この水路は近くの水源から人工的に引いてきたもので、至るところに張り巡らされている。そのことから、水路や漆喰、黒く焼いた壁をはじめとして、近江商人が重要視していた財を火災などの災害から守る一環として水が生活の一部として息づいており、注目すべき点であると考えられる。

(2) 八日市地区

八日市地区は太郎坊宮への参拝のための参道や中心部には旧街道である御代参街道と八風街道が東西南北にわたって続いており、歴史を町全体から感じることができる街並みである。

ここで、まず有名なものとして挙げられるのが、太郎坊宮である。太郎坊宮は標高350メートルの場所にあり、紅葉の時期の景色は多くの観光客を呼び込んでいる。加えて、太郎坊宮は京都の鞍馬の次郎坊天狗と関連する太郎坊天狗が守護していることから由緒ある神社であり、

名前の由来になっているとも考えられる。また、古くから修験者の修業の場となっていたり、参拝の道中には多くの巨石が点在していたり、パワースポットとしても人気がある。

次に、旧街道についてである。まず、東西を走る旧街道として八風街道がある。この街道は、現在の滋賀県の近江八幡から三重県の桑名までをつないでいる街道で、古くは三重県の伊勢まで続いているものであった。続いて、御代参街道である。この街道は、江戸時代には京都の公家の間で、伊勢神宮と多賀大社へお参りするために盛んに用いられた。そのほとんどは、公家本人ではなく、使者を代参として送っており、それらの使者のほとんどがこの街道を通ったため御代参街道と呼ばれるようになったと言われている。

これらのことから、八日市の歴史の古さや由緒の正しき地域であると考えられる。

(3) 能登川地区

1) 猪子山公園

北向岩屋十一面観音（きたむきいわやじゅういちめんかんのん）や、約40基の古墳（こふん）がある。山頂からは市街が一望でき、ふもとにある猪子山公園は桜の名所で、毎年大勢の花見客が訪れる。また、春だけではなく、秋の紅葉も特徴のひとつである。

猪子山では、毎年9月初旬から10月下旬にかけて、タカの渡りが各地で観察されている。一般にタカの渡りをするものは、ハチクマ、サシバ、ノスリ、ハイタカ類、そしてハヤブサ類で、ハクチョウやツルのように家族単位で行わず、個々別々におこなう。



日本野鳥の会公式HP（<http://www.wbsj-shiga.jp/>）より

2) エクレレ

通常よりも細長いエクレアが特徴的な洋菓子専門店で、障がい者の自立を支援するワークセンターの役割を担っている。よく完売してしまうほどの人気商品で、その可愛い見た目も人気の理由のひとつである。



エクレレ公式フェイスブックより

(4) 永源寺地区

永源寺は瑞石山（飯高山）と愛知川（音無川）の山中、静かに佇んでいる。境内はカエデをはじめとする様々な自然の木々に覆われている。創建当時の建造物は全て兵火に焼かれ、現存するものはなく、現在の伽藍は江戸中期以降に再興された。永源寺は古くから紅葉の名所としても知られている。

当山は、南北朝時代の興安元年（1361）に、時の近江守護職、佐々木六角氏頼公が、入唐求法の高僧、寂室元光禅師（正燈国師）に帰依し、領内の土地を寄進して伽藍を創建したことが始まりである。禅師が入寺、開山されると、その高德を慕って二千人あまりの修行僧が集い、山中には五十六坊の末庵を有したと記されている。



永源寺ホームページより

<http://eigenji-t.jp/about/index.html>

参考

- ・東近江市ホームページ www.city.higashiomi.shiga.jp/（閲覧12月26日）

IV 北海道調査

井上優大 中田景子

〔日時〕 2017年9月4日～9月7日

〔メンバー〕 井上優大 中原広貴 澤村奈叶 中田景子

〔ヒアリング先〕

- (1) エコ・ネットワーク代表 小川巖様 代表代行 小川浩一郎様
- (2) えにわフットパス愛好会 会長兼事務局長 前田孝雄様 三浦政敏様
- (3) 北海道黒松内町役場 企画環境課 主査 扇谷智樹様 主事 巳扇隆広様

1 共通質問事項まとめ

(1) エコ・ネットワーク

1992年まで北海道には環境団体がなかったため、スタッフ13名で設立し、現在は家族5名で活動している。環境ボランティアを中心に活動しており、古本を売ったり、会員からの会員費、イベント料、また学生がデザインしたマップや道標の売上により、活動資金を捻出している。フットパスのコースを作成するうえ意識した点においては歩いていて面白いということ。特に歩く側の気持ちを主体的に考えており、人が普段歩かないようなところをコースに入れるようにしている。歩いていて気持ちいか面白いかを考えているほかに、景観がどうか、歩きやすいかを意識している。また、ストーリー性に関しては、あるに越したことはないが、それを追い求めていると、ただの歴史散策になる恐れがあり、面白みがなくなる。だから、ストーリー性だけを追い求めていない。またフットパスの効果としては、一つとして地域にお金が落ちるといことが挙げられる。お金の落ち方はやはりマップの売上と、食である。しかし、札幌のフットパスは日帰りが大半を占めるため、ホテル等へお金が落ちているとは感じられていない。しかしルートに飲食店がある場合、そこにお客さんが入ったり、道に生えている草の手入れや花を植えたり、家の農具の片付け等、見栄えをよくする方が出てくる。つまり地元住民の意識の変化。住民が地域を見直すいいきっかけになる。

フットパスの課題としては、ロングトレイルの事例にはなるが、人の家を覗いたりするウォーカーが現れ、地元住民から苦情が発生し、人の家を覗かないというルールが作られた。また、北海道はじゃがいもの産地で有名だが、種芋は非常に弱く、感染症にかかりやすいため、人種芋畑の出入りは非常に制限されている。しかしフットパスをしにこられた方がそこに入っしまい種芋が全滅するということ問題も起きた。そこで黒松内ではウォーカーに対するルール作りがなされている。また口蹄疫が流行った時も少し歩くことを過敏に考えることもあった。



左から小川浩一郎様 中央 小川巖様

今後の展望としては、若い方に参加してもらうため、インスタグラムやツイッターを積極的に利用し、いい写真が撮れるスポットをいれたコースを入れたイベント開催である。また、フットパスファンを増やし、北海道にもっとフットパスをつくる。

(2) えにわフットパス愛好会

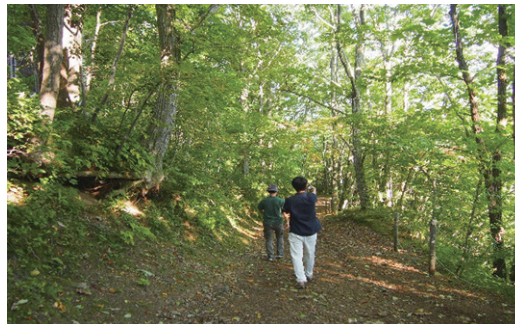
愛好会に加入しておられる方々は50代から70代が主体となっており、現在は役員14名会員53名で活動されている。

活動目的方針は人と人・人と地域・地域と地域を結び触れ合うこと、車の移動では感じられない地域の良さを再発見し、その素晴らしさを発信することにある。また、それによって地域に対する郷土愛を育む。運営については市民活動団体として市から10万円の助成金と会の活動費3万円の計13万円を一年間の活動費として運営している。行政は基本的にフットパスに積極的な関与はしていないが、森の通行道に木屑を敷き高齢者の足腰の負担を軽減するといった取り組みを行っている。地元住民との間では、オープンガーデンというOpenの看板が出ている時は自由に出入りすることができる庭の開放などを促している。オープンガーデンを行うにあたり、一軒一軒足を運び、住民にフットパスコースの一部として組込むことに許可を得ている。

地域住民の会員からは、フットパスコースの選定の際に公園の公衆トイレが使用できるようにすべき等の意見をもらい、それをコースに反映させている。

そして、住民は花の町としての誇りから、来訪者に楽しんでもらえるように手入れを怠っていない。コースの特徴として、案内看板は5コースのスタート地点と中間地点に、コースシグナルは交差点等の分かりづらい箇所に設置している。

また、来訪者の多くが高齢者ゆえに、アップダウンの少ないコースを選定している。道標は矢印を用いて、フットパスコースの道順を案内している。しかし、来訪者などに矢印の向きを変えられ、次の来訪者が迷惑することもある。ガイドは必ず下見をして、四季折々の植物を説明できるようにしておき、ガイドは参加者と地域住民の交流を支える存在を理想としている。また、5コースの「コースガイドマニュアル」を作成し、来年の全道大会に向けて会員にコースガイドを指定して逐次練習を行っており、現在は花のアドバイザーとして3名、鳥のアドバイザーとして1名がいる。また、フットパスの効果としては、人と地域、地域と地域を結び触れ合う事、そして、車の移動では感じられない地域の良さを再発見し、その素晴らしさを発信できる事。地域の文化・歴史に触れ、地域に対する愛着と誇り（郷土愛）を育むことが挙げられる。



左から前田孝雄様、三浦政敏様

(3) 北海道黒松内町役場

黒松内町は約3000人が住む町であり、酪農と福祉の町である。酪農を往復したり、牧歌的風景を目で見て楽しんだりしながら歩こうと組織を立て、平成16年にボランティアを募り、団体を作ってコースを練り、現在までで5コースが完成した。黒松内フットパスの見所や特徴、作成する際にこだわった点として、全5コースの内、どのコースを歩いても、町のシンボルであるブナの見える所があるようにコース設定したことである。また、町の交流施設である自然の家や温泉は町外れなところも多いが、あえてそれらとブナの見える所とを結ぶようなコースにしたことも挙げられる。

またイギリスにも視察に行き、実際に目で見て勉強し、その上で黒松内町に合う取り組みを考えた。フットパスを行う上での配慮については、事故を避けるため、フットパスのコースはほぼ平坦で適地適正の管理をしており、危ない箇所がないように設定している。また、フットパスで田畑の横を通ったりするため、その点に関する注意事項（農作物を採ってはいけない等）もマップに記載している。

また、フットパスの効果として、黒松内町は年4回、フットパスイベントを開催しており、各イベントで、40~50人ほどの参加者がいる。イベントに参加したあとは温泉に寄ってもらったり、宿泊してもらったりしている。また、イベントがない時でも、フットパスマップを買って実際に町を歩きに来る人もいることから、フットパスによる経済効果は出ていると考えられる。

しかしフットパスに関する取り組みを持続させていくうえで、町の住民の高齢化が進んでいるため、コースの規模縮小を考えている。また、観光協会にフットパスの運営を委託していく考えもあり、その際に、観光の受け入れも含めたプログラムを組んだ形で移行していく方針である。



左から巳扇隆広様、扇谷智樹様



写真は寺の沢川コース

2 小括

フットパスを行う上でのルール作り、特に歩く側に対してのルール作りは必要だと考える。コース上にある住宅や私有地に対する配慮をどのように行えば良いか、痛感した。また、住民のことを考え、コースを策定することは非常に大切なことであるが、歩く側の気持ちを最大限反映することも非常に大切なことである。やはりリスクばかり恐れておもしろみがないコースにファンはできないと考えるため、住民への配慮をしつつ、最大限攻めのあるコースを作るべく、今後、地域の方との関係づくりに力を入れていきたい。

恵庭市は花のまちとして、特に地域住民の庭を解放するオープンガーデンにより、地域住民の花のまちとしての誇りが垣間見えた。また、森の中の道ではウッドチップが敷かれ、来訪者の大半を占める高齢者の足腰の負担の軽減や雑草の防止に配慮していた。

以上のことから、フットパスを行うことにより来訪者にお金を町に落としてもらい、花に関わることを通して地域住民のコミュニティが生まれ、地域の活性化が図られていると考えられる。

黒松内町は日本のフットパス先進地として著名である。コースの特徴としては、町全体で酪農が盛んであることから、牧歌的風景を楽しみながら歩くことができることだ。加えて、冒険心を持って歩くことができるよう、山道がコースとして組み込まれている。

定期的に行われるフットパスイベントには、町外からの参加者が多く見られることから、知名度・人気度ともに高いことが窺える。

しかしながら、資金面の問題から、観光協会にフットパスの運営を委託することやコース数を削減することが検討されており、現在がターニングポイントであるといえる。

V 東京都町田市、山梨県甲州市

安田奈於 湯川希

〔日 時〕 9月5日～9月10日

〔メンバー〕 吹野僚平 野間元綺 鈴木彩有里 安田奈於 湯川希

〔ヒアリング先〕

- (1) 町田市役所 産業観光課 観光まちづくり担当：牛腸哲史様
- (2) みどりのゆび：特定非営利活動法人「みどりのゆび」理事兼事務局長 神谷由紀子様
尾留川 朗様
- (3) 特定非営利法人つなぐ理事長：山本 育夫様
- (4) 甲州市役所 山梨県甲州市観光協会 観光交流課 交流イベント担当：三枝俊和様

1 共通質問事項のまとめ

(1) 町田市役所

東京都町田市が実施している政策の中でフットパスは観光面を切り口として取り組まれている。町田市は北部丘陵の昔ながらの里山風景が広がる三層構造で、フットパスはそれを生かしたニューツーリズムとして位置づけられている。初期から市の職員も一市民としてフットパス活動に参加し、行政が主導している。

町田市はNPOにコース作成等の事業を委託し、NPOに資金源を支えている。安全配慮の面においては土地の所有者に一任しており、情報発信についても市としての関わりが薄れつつあるが、市民の活動が中心でも、市や職員が協賛的な役割を果たすことで、現在訪問者による日常的なフットパスが実現している。町田市が把握しているフットパスの要素としては、地域で何かしたいというよその者、キーパーソン、市のバックアップの3点であった。

現在、北部丘陵の緑や農業をどのように生かしていくかが課題となっている。今後はフットパスを持続可能なものにしていくため、不法投棄などの慣行公害防止の啓発活動を行い、住民の負担につながる過度な宣伝をせずに現状維持に努めていく方針である。このことは市と住民

が同じペースで取り組まなければならないという考えが表れている。そして、外国人観光客や東京オリンピック開催に伴って海外と交流し、WAWを通じて町田市の紹介をしていき、若者を呼び込むために学生との提携は行っていききたいと話された。

(2) みどりのゆび

みどりのゆびは緑地保全を目的に設立された団体で、約120名の会員で構成されている。補助金を取ってしまうとその内容に縛られてしまうということで補助金は受給せずに活動されている。最近ではメンバーの高齢化により事務局機能が低下しており、持続的な組織運営の工夫として会計管理や公益管理等のできる人材の育成が必要不可欠である。

行政との連携としては、市の職員が職務を超えて、一市民として組織の総務的な仕事を担ってきた。そして住民の理解を得て、協力を得るために、その地域の誰もが信頼を置く人を見つける等の工夫をしてこられた。カントリーコードを設置しマナーの周知を徹底された。

コースを作成する際は景観を最重要視し、アクセスも考慮して作られた。コースの選定には1年かけられた。イベントを行う時にはマスコミに対して情報提供をして広報をされている。参加者は高齢の方が多く、イベントでは多いと120人の方が参加されるということだがガイドの養成は行わず、地元の方が持っている知識だけで楽しんでもらえるように工夫されている。

町田市には年間350万人訪れているがフットパスによりどのくらいの人が訪れたかは分かっていない。しかし実際に金額的なことには目に見えて効果がある。今後の町田フットパスの課題としてそれぞれの地域が目的・ビジョンを明確に持って活動していくことが重要である。フットパスを行う上で学生には若者目線で地域資源を見つけることが大事であると話された。

(3) NPOつなぐ

NPOつなぐはまちのよさ・おもしろさを伝えたいという思いからフットパスを始められた。会員制は300人存在しており、まちのひとが3割、その他の人7割で構成されている。

山梨県立博物館・山梨県立文学館と連携されており、「文学者のゆかりの地ツアー」等を開催された。フットパスを行うにあたって住民の方から苦情が来ると言うことは特になく、むしろ自分のまちでもして欲しい。という声の方が多かったため、住民の方に理解を得るために努力をしたこと等はなかった。

コースの作成にあたっては、集合場所に留意すると共に、駐車場や公的な施設があるところ、トイレ休憩ができるところを考慮して作成された。ツアーの広報として、郵送でフットパスツアーの情報を会員全員に郵送し、NPOつなぐのホームページにもアップされている。ガイドマップはモノクロであるが、「モノクロだから塗り絵ができる」として売り出されている。そして「分かりやすく」をモットーに、面白く今風に、誰もが楽しめるように工夫されており、地元の大学生も作成に参加されている。このガイドブックは月に100冊200冊売れるほど人気である。

フットパスを学生が行う上で一年計画だからこその弊害があり、それをしっかり理解した上で、地域の人たちだけで継続していけるような仕組み作りが重要であると話された。

今後は全国にガイドマップを広げていくことが目標である。

(4) 山梨県甲州市役所

甲州市役所では観光政策を行うために、近隣の市と連携し、PR活動やイベント等が取り組まれている。甲州市ではフットパスは観光として位置づけられている。甲州市役所には「ある〜く こうしゅう推進協議会」が設置されており、市内でフットパスを行っている11団体が加盟している。市はこのような加盟団体に対し、コースマップ作製、コースの宣伝等の事業を推進し、団体にはイベント開催等の活動をしてもらう。そしてその際の活動費を助成し、民間団体に対して活動の支援を行っている。また、市はイベント開催にあたり、それに伴ってかかるマップの印刷代も補助されている。

フットパスコース全体に共通する注意点はパンフレットに記載し、安全配慮については市が開催するイベントには市の予算より保険がかけられ、各団体が主催するイベントは参加費に保険代が含まれる形となっている。また、甲州市ではガイドの育成にも力を入れており、年に一度観光ボランティアガイドの養成講座が開かれている。

フットパスに取り組むにあたり、地元の住民から苦情や反対意見が寄せられたことはなく、フットパスに関わる市民関係者や地域の代表者にフットパスの趣旨などがうまく伝わっていき、理解が得られた。それは、もともと観光客が集まりやすい甲州市ならではの考えられる。

今後は甲州市の魅力がさらに発信され、甲州市のファン、定住人口の増加へつながることに期待していると話された。

2 小括

東京町田のフットパスは景観・自然環境の保全の手段としてフットパスを取り入れていることが特徴である。市の職員が職務を超えて、一市民として組織の総務的な仕事を担っていたということが重要である。山梨のフットパスはNPOつながが中心的な役割を担っており、モノクロ印刷のガイドブックだからこそ愛着を持って多くの人がフットパスを楽しむことができるのだと感じた。

東京都町田市役所では、職員の方々の中でまずはフットパスというものの理解をもっと広めていく必要があると感じておられる。担い手問題や不法投棄等の課題である一方で、フットパスは市の協力と民間の方の行動のバランスを考えていくことが非常に大切だと学ぶことができた。

また、山梨県甲州市役所ではフットパスが観光として位置づけられている。他の県や地域で課題となりがちな地元住民の理解などの問題は生じることなく、受け入れられてきた。それは、昔から甲州市が観光地として広く知れ渡っていた地域だから、ということではないだろうか。



カントリーコード



みどりのゆび
尾留川朗様とフットパス



つながNPO
主催のイベントにも参加



山梨県甲州市 ボランティアガイドの方、
甲州市役所の三枝俊和様とのフットパス



東京都町田市役所でのヒアリング調査
午腸哲史様

Ⅵ 熊本県美里町

斎藤菜乃子 本田大輝

〔日時〕 2017年9月5日

〔メンバー〕 斎藤菜乃子 本田大輝 山本英樹 由良康太 米住京子

〔ヒアリング先〕

- (1) 美里フットパス協会 井澤るり子様 濱田孝正様
- (2) 美里町役場林務観光課 石原恵様 本村友一郎様

1 共通質問事項まとめ

(1) 熊本県 美里町 美里町役場林務観光課

美里町のフットパスを担当しているのは町役場の林務観光課である。美里町ではフットパスを民間主導のものとして位置付けている。また、行政は一定期間での部署変更があり、フットパスに関する取り組みに向いていないため、広報や交通網整備等の民間団体をサポートするという形をとっている。行政では、フットパスは様々な活動のベースコンテンツとなり得るものであり多様性のある活動であるため、民間団体が取り組んでいる活動を支援するとともにフットパスと関連付けたプログラムを行政で実施することもできると考えられている。

次にフットパスの効果について紹介する。美里フットパスは年間計600万円の収支がある。例えば、1セット500円のフットパスマップは年間500セットの売り上げがあり、参加費2500円のフットパスイベントに年間1300人が参加している。その他には100円のトイレ使用料や会費、他のフットパス推進地域へのアドバイス等がある。

イベントには人数を把握できるメリットがあるが、地域の活性化はあまり望めないため、フットパスをイベント型ではなく、日常型のものにすることが大切である。美里町の観光は一過性のイベント型であったのだが、フットパスによって日常型へと変化した。これによって美里町が観光の目的地になってきていることは大きな成果である。イベントの参加人数からも交流人口は増加したと考えられ、また外部の人に評価されることにより地域住民が地元を誇りを持つようになった。このように美里町はフットパスを地域活性化のツールとして使うことを目的とした独自のフットパスをつくっている。

(2) 熊本県 美里町 美里フットパス協会

美里フットパス協会が、取り組みを始めたきっかけは過疎を防ぐために始めた農村振興である。経済省・農林水産省・厚生労働省の補助事業として、美里町地域振興協議会、商工会が協力し、2011年から2年間、交付金による活動を行っていた。その事業の終了後、自立した活動を行うために美里フットパス協会を設立した。協会の目的は、フットパス活動を通して多様な事業を実施し、美里町での観光客の滞在時間の増加や交流人口の増加によって美里町の振興に寄与することである。活動方針として美里町をモデルとしたフットパスの普及活動に努めたいとしている。会員は100名程度で、地域の人だけでなくフットパスを通じて美里町を訪れた外部の人も入会している。また、運営や事務はフットパス研究会に委託している。

地域住民と行政、NPOが連携をとる際は、住民の理解を得るために地域に組みの資料を全戸に配布し、またコース作成の際にワークショップを開催し地域住民に自分たちが知っているいい景色の道を出し合ってもらうことでコース作りに参加してもらうなどの工夫をした。コース作成の際に何度もその地域を訪れて地域住民と交流することでより多くの住民にフットパスに関心を持ってもらうとともに、住民との信頼関係を構築しまちづくりへの参加を促していく。これらの工夫によって、現在フットパスのコースが設定されている地域において住民からの苦情などは出ていない。このように、NPOの役割として地域住民全員にまちづくりに参加してもらえるようにすることが挙げられる。具体的に、住民の理解を得るためにコースを作成する際には次のような手順を踏む。まず、地域住民の方々と関係を築き地域を歩かせていただく許可をもらう。フットパスに関係のないイベントにも参加し、また何度も地域を練り歩くことで地域住民の方々との交流を深めると同時に、地域外の人々が地域を訪れることに慣れてもらう。次に、地域を一通り歩いた中から「話しかけられる回数の多かったところ」に目星をつけて、モデル地区となる場所を決め、練り歩く。最初は不審者がられるかもしれないが、何をしているのかと聞かれた際に「フットパスをしている」とフットパスについての説明をすることが重要である。その後、ワークショップを開催し、地域住民の方々に自分たちが知っている良い景色の道を出しあってもらう。また、地域外の方々も招き地域の魅力発見に努める。この際に、被っても良いのでどのようなコースがいいかを参加者に聞くことで様々な意見を取り入れることができる。これによって回答してくださった方々もコース作成に参加したことになるため、地域住民の方々に「自分も参加者」であることを自覚・意識してもらうことができる。

安全配慮に関しては基本的には自己責任で、イベントの際には保険の加入を促すことや注意喚起などにとどまっている。また、コースはすべて公道に設定されており、地域住民が主体となって管理のできる道のみを採用し、又、歩きにくく壊れる可能性の高いあぜ道などはコースに入れないように考慮している。

その他にコース作成の際にいくつかの工夫をしている。まず、期待感を煽る工夫である。坂道や回り道を入れることで期待感を煽ることができる。またスタート地点をわざと何もないところに設定することでビューポイントやオススメポイントでのフットパス参加者の満足度を上げることができる。ビューポイントとは撮影ポイントのことである。次に道標に関するものである。美里町では、参加者が道に迷わないようにコースの分かれ道ごとに案内板や目印のリボンを設置している。リボンを設置することで、参加者はどの道がコースになっているのかを積極的に散策するため、フットパスへの満足度を上げることができると考えられる。また、フットパスを実施する上でいくつかの留意点があげられる。まず食事に関するものであるが、地元

の飲食店がなければ、イベント時のみでも構わないので地元の方々に普段から食べている料理をいただけるように依頼することで対策を図っている。次にトイレに関するものである。フットパスコースの距離が4 km前後の場合、コースが面白ければコース途中には必要ないと考えられ、また神社や寺にトイレを貸していただけるように交渉し、トイレの使用料をいただき還元する形をとるという方法をとっている。さらに道標に関するものである。美里町では、参加者が道に迷わないようにコースの分かれ道ごとに案内板や目印のリボンを設置しておられる。リボンを設置することで、参加者はどの道がコースになっているのかを積極的に散策するため、フットパスへの満足度を上げることができると考えられる。

マップは、主に写真とイラストの地図で構成されており、コースの大筋とビューポイント、オススメポイント、獣害対策用の電気柵の取り扱い等のコースを歩く際の注意点を記載している。また、細かい道は記載せず、コースの大筋の道を記載することにとどまることで参加者の積極的なコースの散策を促している。他方で、コースを外れて細かい道に入る際には地域の人に許可をいただいてからというルールを設けることで地域住民の方々への配慮もされている。

NPOとしてのPR活動はSNSなどを利用してイベント情報、活動情報などを発信している。また、年10回ほど行われるイベントに際して四季ごとの魅力をしっかりと伝えることでリピーター確保に努めている。

最後にガイド養成についてである。ガイドは最初の1年間でコースの基本的知識を習得する。その後、コースを案内する際にどのように案内するのがよいのかについて考える。特にコースを歩いているときには、あえてガイドから説明をしないようにすることで、分からないことや気になったことをガイドに質問することに繋がるため、参加者の楽しみが増える。そのために質問をしてもらう技術を鍛え、歩く人たちが能動的に楽しむことができるようにする必要がある。また、ガイドは参加者と地域住民の交流の懸け橋のような存在になることを理想としている。

2 小括

今回フットパスに取り組んでおられる地域や団体を訪れたことで、行政と民間の距離間の大切さを学ぶことができた。行政は一定期間で異動があり長期間の取り組みであるフットパスに向いていないため民間団体のサポートをする形にとどまり、民間団体が主に取り組む形をとることでフットパス活動の長期化を実現していた。行政と民間団体がどこまでの連携をとるのかという双方の距離間が留意すべき点として考えられるが、美里町ではPR活動における広報や交通網の整備等の行政にしかできない分野に絞り取り組み、その他の分野には関わらないことで良好な協力関係を築いていた。両者が深く関わるのではなく、明確に担当分野をわけ



ヒアリングの様子



実際に美里のフットパスを歩く

とで協力関係を築いていた点に大変感銘をうけた。また、フットパスは地域住民が主役であることを再認識することができた。道の管理維持や地域住民と参加者の交流などでも分かるように、地域住民が主体的に行動していかなければフットパスは成り立たないといえる。地域住民が主体的に行っていくためには、自分が参加者であるという自覚を持ち、無理のない範囲で楽しく行うことができることが重要である。

Ⅶ 龍谷祭の取組について

澤村奈叶 鈴木彩有里

1 龍谷祭アンケート結果について

今回、2017年第95回龍谷祭において来場者にアンケートを行った。来場者の男女比はやや男性が多いが、フットパスへの興味関心が性別による偏りがないといえるだろう。年齢層は学園祭であるということを加味すれば妥当であり、現状フットパスに多く参加している年齢層は60代以降であるため若者世代にフットパスを紹介できたことは大きな前進である。

またフットパスの展示についての情報源は龍谷祭広報雑誌が最も多く、次いで当日アナウンスが挙げられた。プロジェクト内でのチラシも作成したが、あまり成果が得られていないことが読み取られる。次年度に向けて更なる改善が必要であり、また龍谷祭からの広報により力を入れたいと考える。

フットパスの認知度としては、圧倒的に知らなかった人が多く、知っていたという人はわずか8名であった。今回の私たちみらプロによるポスターセッションに大変満足してくれた方が多数であることから、フットパスの魅力を多くの人に周知できたといえるのではないかな。

また、フットパスに参加した際の昼食に支払える金額について、最も多かったのが1000円、次いで1500円であった。少数ではあったが1500円以上という回答も見られ、もし今後フットパスに興味を持ってくれる人が増えていけば、フットパスの目的の一つである、地域にお金が落ちることは大いに期待できそうだ。

最後にフットパスをする際にどのようなものに着目するかという問いに対し、やはり景色やグルメに着目する人が多数見受けられた。「インスタ映え」が今年の流行語大賞にも選ばれたように、フットパスにもそのような要素を入れることは大変重要であると再確認できた。

今回の活動を通し、沢山の人にフットパスを知ってもらい、ポスターセッションでのお客様との会話やアンケートで、私たちだけでは考えつかなかった多くの情報を得ることができた。今後に生かせる大変貴重な機会になったと感じる。

2 龍谷祭アンケート質問内容

- Q1 現在の性別について可能な範囲でお答えください。
- Q2 現在の年齢について可能な範囲でお答えください。
- Q3 今回のポスターセッションが行われることをどのようにお知りになりましたか。
- Q4 フットパスについてはご存知でしたか。
- Q5 ポスターセッションについての説明は満足のいく内容でしたか。
- Q6 あなたがフットパスをするなら、どのようなものに着目しますか。
- Q7 あなたがフットパスに参加した際に、お昼ご飯に支払える金額についてお聞かせくだ

さい。

※以下アンケート集計の結果である。

Q1	性別	件数	割合
1	女性	53	36.05442
2	男性	74	50.34014
0	未回答	20	13.60544
	計	147	

Q2	年齢	件数	割合
1	10~19	25	17.0068
2	20~29	56	38.09524
3	30~39	9	6.122449
4	40~49	24	16.32653
5	50~59	22	14.96599
6	60~	7	4.761905
0	未回答	4	2.721088
		147	

Q3	情報源	人数	割合
	みらプロ	19	12.92517
2	アナウンス	23	15.64626
3	龍祭	52	35.37415
4	その他	49	33.33333
0	未回答	4	2.721088
		147	

Q4	認知度	人数	割合
1	知っていた	8	5.442177
2	知らない	134	91.15646
3	その他	5	3.401361
0	未回答	0	0
		147	

Q5	満足度	人数	割合
1	大変思う	73	49.65986
2	そう思う	61	41.4966
3	普通	12	8.163265
4	あまり	0	0
5	思わない	0	0
0	未回答	1	0.680272
		147	

Q6	金額	人数	割合
1	500 円	9	6.122449
2	800 円	15	10.20408
3	1000 円	73	49.65986
4	1500 円	37	25.17007
5	1500 円以上	10	6.802721
0	未回答	3	2.040816
		147	

Q7	着目	件数	割合
1	景色	114	36.8932
2	歴史・文化	62	20.06472
3	グルメ	78	25.24272
4	アクセス	30	9.708738
5	関わり	25	8.090615
6	その他	0	0
0	未回答	0	0
		309	

3 小括

私たちがこれまでフットパスを主軸として行ってきた活動を多くの方に知ってもらい、フットパスとはどういうものなのか、まずはその魅力を理解してもらい、最終的にこの活動が滋賀県東近江市の活性につながる一つのきっかけとなることを龍谷祭での目標とした。

足を運んでくださった方の年齢層は学園祭ということもあり、比較的若者が多かった印象である。現状フットパスに多く参加している年齢層は60代以降であるため、若者世代にフットパスを紹介できたことは大きな前進である。展示していたポスターは、今年度みらプロが取り組んだ夏合宿調査の報告と東近江市におけるコース地の説明を中心として作成したものである。そのポスターを前に興味津々に説明を聞いてくださっているのを見て、お客様の時間の許す限りフットパスの魅力をできるだけ多く伝えたいという思いが込み上げてきた。

ビデオ上映は、現在日本の地方が抱えている問題、地方創生の意義、そして今年度みらプロが取り組んできた活動経緯、フットパスの意義、魅力を十分伝えられる内容になっていた。また、常時スクリーンを使用して流していた動画は、能登川の美しい水や歴史を中心とした映像と、それに合った音楽が会場全体の雰囲気をつくっていた。

アンケートでは、私たちだけでは考えつかない多くの意見をいただいた。やはり、フットパスをする際の着眼点として最も多かった意見は、インスタ映えのする景色やグルメであった。若者の興味を引く要素として大変重要な要素であると改めて感じた。

3日間の龍祭で、予想していたよりもはるかに多くの方に来場していただき、沢山のの人にフットパスを知ってもらうことができた。今後に生かせる大変貴重な機会になった。



ポスターセッションの様子



活動報告の動画上映

VIII コース案の説明

中原広貴 野間元綺 吹野僚平

1 五箇荘コース

(1) コースのストーリー

近江商人は、日本三大商人の1つで「三方よし」の思想のもと全国各地で活躍していました。財力をアピールすることは商売時の信用問題とも大きく関わっており、その財力は解体した舟板の再利用や屋敷・蔵の白壁で垣間見ることができる。

五箇荘のあちこちに張り巡らされた水路は、財を最大の脅威である火災から守るためのものでした。川中地蔵は火災から守り、まちの発展を祈願したものと考えられています。

近江商人のふるさとである五箇荘の水を巡る歴史、そして文化をはじめとして、四季の変化と100年の歴史を感じる紅葉公園をめざして歩きます。(舟板壁、白壁の写真)

(2) コース詳細

1) 五箇荘

五箇荘は湖東平野のほぼ中央に位置しており、古代条里制地割を基礎として構成された集落、そしてその外側には水田景観が一面に広がっている。また五箇荘は日本三大商人の内の一つである近江商人のゆかりの地として知られている。その内金堂地区にはその商人らの本宅や杜寺等の歴史を感じさせる町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区として認定されている。

2) 近江商人屋敷 外村宇兵衛邸

重要伝統的建造物群保存地区に指定されている五箇荘金堂町にある五箇荘商人の屋敷。文化10年(1813)に商いを始めた外村宇兵衛は、努力の末に東京・京都などに支店を有し呉服類の販売を中心に商圏を広げ、明治時代には全国の長者番付にも名を連ねた。また、当家の庭は、作庭当時神崎郡内一番の庭とも言われていた。

3) 水路

五箇荘で、ここまで水路が網目状に流れているのは、五箇荘に住んでいた近江商人たちが火災から財産を守るためであった。水の乏しい五箇荘では財産を失う最大の脅威が火災であったことから、すぐに火を消せるようにしなければならなかったからである。



五箇荘町内の水路

4) 弘誓寺

この寺を開基した愚咄坊(ぐとつぼう)は那須与一(なすのよいち)の嫡(ちやく)子で、本願寺三代の覚如上人(かくによしょうにん)が関東へ下る際に弟子となり、犬上郡石畑(いぬがみぐんいしはた)に一字を建立した。正応5年(1292)には現在の寺号を受け、その後神崎郡鉢光寺(たいこうじ)村に移り、天正9年(1581)には現在地の金堂に永住することになった。そして現在の建物は宝暦5年(1755)、高木作右衛門(たかぎさくえもん)によって

建てられたもので、国の重要文化財と市指定文化財に認定されている。

5) 景清道

景清道とは、五個荘内の中央を南北に走る古道であり、源平合戦の昔、平家方の勇将である藤原景清が盲目となった自己の目の回復を祈って京都の清水寺に詣でた時に通った道であるとされている。

また景清道は「陰清道」とも書かれていることから、中山道の間道として利用されていたとも言われている。

6) 船板壁

黒く焦げた木材は船板と呼ばれているもので、実際に船の一部として使われていた木材を解体して建物の張り付けたものである。なぜ、財力を示すことになるかという点と実際に船を解体して得られた木材を使うためには、多くの船を建物の外装のためだけに購入しなければならない、さらにそれを購入するにはたくさんの財が必要となったためである。



船板壁

7) ハクモクレン

Hakmokrenは福應寺の前方に位置しており、アート作品とカフェとが一体となったお店である。ここでは800円のケーキセットとしてほんのり甘いロールケーキと自家製のコーヒーを食べることができ、全体としてくつろぐことができる空間が広がっている。



紅葉公園入口の景観

8) 紅葉公園

紅葉公園は、近江商人の塚本仲右衛門が自然の地形を生かして、100年前に造園。晩秋の紅葉は非常に見事で、山全体が赤や黄色に染まる姿は、人々の心をなごませる。紅葉は楓が中心。一帯に広がる落葉樹や遊歩道でハイキングや森林浴などが楽しめる。

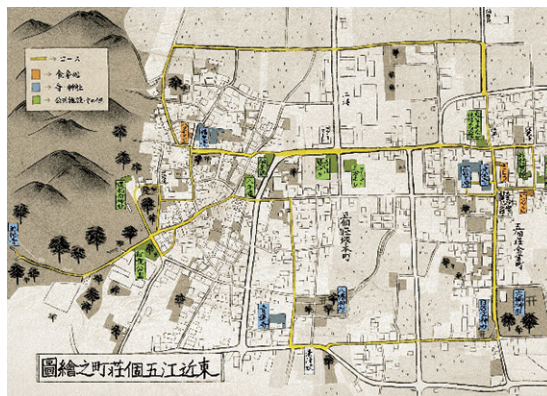
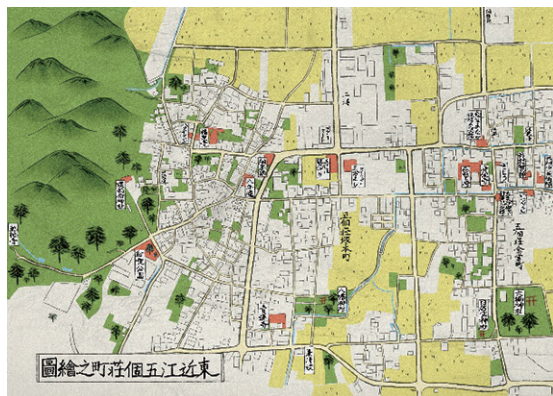
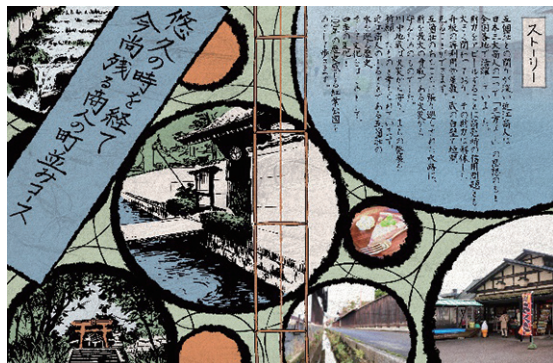
(3) 五個荘デザインマップの紹介

五個荘デザインマップの特徴としては、主に五個荘が近江商人ゆかりの地として歴史的なまち並みが多く残っているという点を考慮し、古地図をモチーフとしたものを作成した。

また黄色い線でコースが示されているマップについては、食事処、寺・神社、公共施設等を

色分けすることによって分かりやすくなるように工夫している。

今後の方向性としては住民の方々から、五個荘のポイントとなる点を詳しくお聞きした上で、私たちがリライトしたものをマップに反映するとともに、住民の方々の視点や考えなども加えていきたいと考えている。



2 能登川コース

(1) コースのストーリー

このコースの特徴は、JRの駅から徒歩30分以内で登ることができる猪子山に登っている途中の景色と頂上からの絶景である。また、この山は歴史と言う面や生物の面でも楽しめる山である。そして、その麓のユニークかつバラエティーに富んだ地域の食事を楽しめるコースとなっている。

(2) コースの詳細

1) 猪子山の駐車場

猪子山の麓の駐車場がコースのスタート・ゴール地点となっている。そしてこの駐車場には、トイレも完備されている。

2) 猪子山

この猪子山は、徒歩20分程度で登れるため、散歩感覚で登ることができる山である。この山の頂上から能登川の絶景を眺めることができる。そして、この猪子山はタカが一年に一万羽以上も見ることのできるタカの名所でもある。また、ここには石を神様として崇める自然信仰が

存在し、山の中腹、頂上ではその様子を見ることができる。



猪子山の頂上からの景色



猪子山中腹で石を奉っている様子



猪子山中腹

3) エクレレ

通常よりも細長いエクレアが特徴的な洋菓子専門店で、障がい者の自立を支援するワークセンターの役割を担っている。よく完売してしまうほどの人気商品で、その可愛らしい見た目も人気の理由のひとつである。

4) 二丁目植堂

JR能登川駅から徒歩2分くらいのところにある。「植物」と「食」をテーマにしたお店で、



エクレレのエクレアー一覧



二丁目植堂の店内

外観や店内にはたくさんの植物が置かれていてとてもおしゃれな空間である。土日限定でキーマカレーも食べられる。テイクアウトも可能である。

5) 丸辰

こちらは、コロッケ、ソーセージ、玉子、とり串、串カツ、トンカツなどを揚げたてのものが頂けるお店。この店のおすすめは、コロッケである。

3 八日市コース

(1) コースのストーリー

親玉本店は御代参街道と旧八風街道とがT字型で交わり、八風街道は現在の滋賀県の近江八幡から三重県の桑名までをつないでいる街道で、古くは三重県の伊勢まで続いているものであった。御代参街道は、江戸時代には京都の公家の間で、伊勢神宮と多賀大社へお参りするために盛んに用いられた。そのほとんどは、公家本人ではなく、使者を代参として送っており、それらの使者のほとんどがこの街道を通ったため御代参街道と呼ばれるようになったと言われている。

江戸時代から商人や公家等が御代参街道と八風街道を通っていて、商売で発展したまちであった。近江商人は東京などの都市に出て利益を出し、隣家との火事防止のための「うだつ」があがることにより、近江商人と名乗ることができます。

近江商人や旅人が行き来した約400年の歴史ある街道の風情が感じられます。そして、東近江市のローカル線である長谷野駅を目指して歩きます。

(2) コースの詳細

1) 太郎坊宮駅前

太郎坊宮前駅には駐車場があり、そこから桜の名所である太郎坊宮参道を通ります。太郎坊とは鞍馬の次郎坊天狗の兄であり、まさにその謂れのごとく、むき出しの大岩と急傾斜のそそり、立ちっぷりが周囲を圧する存在感を放っている。



2) 旧八風街道

旧八風街道を通ると田んぼが広がります。この旧八風街道沿いの用水路や道路には地蔵があり、それは水への感謝、川の流れの安全や交通安全等を祈るという目的の下祀られたとされている。

3) 新八日市駅

「新八日市駅」は1913年築の現役木造駅舎である木製改札口、窓枠なども風格漂うモダニズムを現在に伝えている。

4) 親玉本店

「親玉本店」は御代参街道と旧八風街道とがT字型で交わり、御代参街道は三重県の伊勢に

続く。親玉は御代参街道から見た突き当りに饅頭屋である。江戸時代から商人等が御代参街道と八風街道を通っていて、商売で発展していた。

5) レンガのえんとつとまれ

「レンガのえんとつとまれ」は地域の”お母さん”たちが作る手作りランチとお惣菜が人気。歴史が深い赤レンガの煙突が目印である。

6) 中野ヴィレッジハウス

「中野ヴィレッジハウス」は空家等活用モデル事業の一環であり、約200年の歴史を持つ蔵を改築したコミュニティスペースである。地域の歴史資産でもある蔵の有効利用を模索していた所有者と地元有志が同事業に名乗りを上げ認められた蔵には住民が気軽に相談できる地域密着型ボランティアセンターを同市社会福祉協議会が新設することも決まっている



中野ヴィレッジハウス

7) とび太くん

「とび太君」は滋賀県旧八日市市の社会福祉協議会が中心となり、急増していた飛び出し事故を未然に防ぐ啓発活動を展開するという計画が持ち上がりました。看板製作業の久田工芸さんが啓発資材の製作を請け負うこととなり、代表者久田泰平さんの手によって、「坊や」が飛び出す様子をかたどった「飛び出し注意」を促す合板製看板「飛び出し坊や」が考案された。

8) 今堀日吉神社

「今堀日吉神社」の文書は日本の中世史研究上、重要な文書群で、特に商業関係文書と惣村関係文書を多く含む点が注目される。

9) 蛇砂川

「蛇砂川」は彼岸花が咲いており、また地域住民が再生に取り組むことで新しい田園景観の形成や価値の創造によりそれらを通じた地域の誇りにつながる可能性がある。

4 コースの展望

フットパスでは、地域住民や様々な専門家などとともにコースを歩きコースを作成するのが一般的である。その過程で地域の魅力を地域住民が発見・共有し、地域に誇りを持てるようになるということもフットパスの目的に置かれている。

今回作成した3つのコースは、我々大学生のみの観点で大学生のみで作成したものである。よって、これらのコースを作成したことで、地域住民が誇りを持てるようになったとは言えないだろう。また、大学生の視点で作ったコースであるため、地域の魅力を一面的にしか捉えることができおらず、地域の歴史、文化などの魅力を最大限反映させたものとも言えない。要するに不完全なものである。

しかし、我々が行ったこれまでの活動は失敗であったとは考えていない。これらの活動は、地域住民に対して、大学生から見える地域の魅力、地域に受け入れてもらうための誠意を伝えることができるのである。実際、このコースを地域で発表させてもらうことで、地域住民とのつながりを作り、フットパスに巻き込むことができたことができた。これらはフットパスを大学生が行うための第1ステップである。要するに、よそ者である大学生を受け入れてもらうため、フットパスに地域住民を巻き込むためのマップ・コース作成である。

第1ステップでフットパスに地域住民を巻き込むことができたため、今後は第2ステップに入っていく。このステップでは、地域住民、様々な分野（歴史や文化、植物など）の専門家と我々大学生で、ワークショップ、まち歩きを共に行い、地域の魅力を発見し共有していく。これにより、地域住民がその地域の知らなかった魅力を知ることができ、地域を誇りに思うことにつながる。また、様々な角度からの視点を集約させることができるため、地域の魅力を最大限反映させたコース、マップを作成できると考える。

参考

- ・NPO法人歴史資源開発機構『日本遺産魅力掘り起し調査報告書』（H29.3東近江市）
- ・一般財団法人東近江市観光協会「滋賀県東近江市五個荘一白壁と蔵屋敷マップ」
- ・一般社団法人八日市まちづくり公社「東近江市八日市ぶらり市街地MAP」（H29.3）
- ・東近江市観光ボランティアガイド協会「東近江市八日市地区市街地観光MAP」（H29.3）
- ・毎日新聞「蔵改築、交流の場オープン、空き家有効活用 東近江」
(<https://mainichi.jp/ch170462724i/%E4%B8%AD%E9%87%8E%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%83%AC%E3%83%B8%E3%83%8F%E3%82%A6%E3%82%B9>)

IX 総括

由良康太

私たちは今年度東近江市においてフットパスをテーマとしたまちづくりに取り組んできた。近年、環境、経済など様々な分野、方面において「持続可能性」というものが重要視されている。まちづくりに関しても例外ではなくどのように持続可能な発展を目指すのかということが大きな課題とされている。そうした状況の中、日本で密かに浸透しつつあるのが「フットパス」である。フットパスは歴史、伝統、文化、自然といった地域のありのままの姿、景観をつなぐことで地域の魅力を発信することができる。持続可能なまちづくりを可能にするためには地域に元来存在する資源を有効に活用していく必要がある。このような意味において「フットパス」は地域に眠る潜在的な魅力を引き出すことができる可能性を秘めているといえる。私たちはこの調査を通じて日本におけるフットパス先進地の調査を行った。そこで私たちはそれぞれの地域において活動されている多くの地域住民の方々からたくさんのお話を聞く機会を得た。北海道、東京、山梨、九州場所は違えどもどの地域においても様々な工夫を凝らしてフットパ

スに取り組んでおられた。また、地域住民の方々のみならずフットパスを通じてまちづくりに参加している北九州大学の廣川先生とそのゼミ生の皆さんとも意見交換を行った。そこでは大学生がフットパスに参加する意義や目的などについて議論を行った。このような議論や意見交換を通してフットパスには地域の住民をどのように巻き込んでいくのかということが最も重要であるということを学んだ。

私たちが実際フットパスに取り組んできた東近江市にはフットパスをするのに欠かせない資源があふれている。そのような素晴らしい環境の中で私たちは地域の良い景観の道をつないでコースを作成して来た。今後の課題としては地域住民の方々と一緒にまちあるきを行ってフットパスを地域のものにしていかなければならないと考えている。また、マップ作成に際してはさらに掲載すべき情報を整理検討し、道標のデザインやロゴマークなどを検討していくとともに東近江独自のフットパスのスタイルの確立を目指していきたい。